

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

国 分 第 3 遺 跡

西都農業協同組合の宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、平成15年度西都農業協同組合の宅地造成に伴う発掘調査を実施いたしました。本書は、その発掘調査の報告書であります。

調査の結果、縄文時代早期と推定される集石遺構をはじめ古墳時代後期の消失円墳の周溝や地下式横穴墓、そして、土壙などが確認されました。

このなかで、地下式横穴墓は消失円墳の周溝に付帯して検出されていますが、古墳と地下式横穴墓との関連や、西都市における古墳時代終末期の埋葬儀礼を考えるうえでは非常に貴重な発見であり、大きな成果を上げることができました。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものであります。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いです。

なお、調査にあたりご理解・ご協力をいただいた西都農業協同組合の方々、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に衷心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

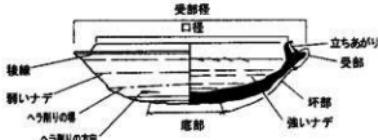
西都市教育委員会

教育長 黒木康郎

例　　言

- 本書は、西都市教育委員会が西都農業協同組合の委託を受け、平成15年度に実施した国分第3遺跡発掘調査の報告書である。
- 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり、平成15年6月20日から平成15年9月8日まで実施した。
- 本書使用の遺構実測図及び浄書は義方が行った。
- 本書使用の遺物実測図は、義方が作成した。
- 本書に掲載した遺構・遺物写真は、義方が撮影した。また、遺跡の空中写真は㈱スカイサーべイと委託し行った。
- 本書の執筆・編集は義方が行った。
- 本書に使用した方位は、Fig. 1が平面直角座標系第II座標系であり、その他は磁北である。この地点の磁北は真北より $5^{\circ} 25'$ 再編している。
- 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
- 本書に使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版 標準土色帳』に準拠した。

凡　　例



目　　次

第Ⅰ章　序説

第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の体制	1

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

第Ⅲ章　国分第3遺跡の調査

第1節　国分遺跡のこれまでの調査の成果と概要	4
第2節　調査区の設定と概要	7
第3節　遺構と遺物	7
1. 縄文時代の遺構と遺物	7
2. 古墳時代の遺構と遺物	9
2号地下式墓寄生型消失円墳	9
3号地下式墓寄生型消失円墳	10
1号消失円墳	13
2号消失円墳	14
5号地下式横穴墓	15
6号地下式横穴墓	19
3. 古墳時代以降の遺構と遺物	19

第Ⅳ章　まとめ

挿図目次

- Fig. 1 国分第3遺跡周辺位置図(s=1/25,000)
Fig. 2 国分第2・第3遺跡遺構分布図(s=1/800)
Fig. 3 1号～4号地下式横穴墓実測図(s=1/160)
Fig. 4 国分第3遺跡遺構分布図(s=1/200)
Fig. 5 集石遺構実測図(s=1/40)
Fig. 6 2号地下式墓寄生型消失円墳実測図(s=1/100)
Fig. 7 2号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図(s=1/40)
Fig. 8 2号地下式墓寄生型消失円墳周溝内出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 9 3号地下式墓寄生型消失円墳実測図(s=1/100)
Fig. 10 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図(s=1/40, 1/80)
Fig. 11 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝内出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 12 1号消失円墳実測図(s=1/100)
Fig. 13 1号消失円墳周溝土層断面図(s=1/40)
Fig. 14 1号消失円墳周溝内出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 15 2号消失円墳実測図(s=1/100)
Fig. 16 5号地下式横穴墓堅坑土層断面図(s=1/40)
Fig. 17 5号地下式横穴墓実測図(s=1/40)
Fig. 18 5号地下式横穴墓堅坑及玄室内出土遺物実測図(s=1/2, 1/4)
Fig. 19 6号地下式横穴墓実測図(s=1/40)
Fig. 20 5号地下式横穴墓出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 21 土壙実測図(s=1/40)
Fig. 22 土壙出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 23 柱穴内出土遺物実測図(s=1/4)
Fig. 24 5号・6号地下式横穴墓堅坑内堆上変遷状況(s=1/200)

表目次

Tab. 1 出土遺物観察表

図版目次

- Pl. 1 1. 国分第3遺跡遠景(空撮、西より)
2. 国分第3遺跡近景(空撮、真上より)
Pl. 2 3. 1号集石遺構検出状況
4. 2号集石遺構検出状況
5. 3号集石遺構検出状況
6. 2号地下式墓寄生型消失円墳検出状況(空撮、
真上より)
7. 3号地下式墓寄生型消失円墳検出状況(空撮、
真上より)
Pl. 3 8. 3号地下式墓寄生型消失円墳検出状況(南東より)
9. 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面状況
10. 1号消失円墳検出状況(空撮、真上より)
11. 1号消失円墳検出状況(南より)
12. 2号消失円墳検出状況(北より)
13. 5号地下式横穴墓堅坑土層断面状況
14. 5号地下式横穴墓堅坑検出状況
Pl. 4 15. 5号地下式横穴墓玄室内検出状況①
16. 5号地下式横穴墓玄室内検出状況②
17. 6号地下式横穴墓検出状況(南東より)
18. 6号地下式横穴墓玄室内検出状況①
19. 6号地下式横穴墓玄室内検出状況②
20. 1号土壙検出状況(西より)
21. 2号土壙検出状況(東より)
Pl. 5 各遺構出土遺物
Pl. 6 各遺構出土遺物

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯

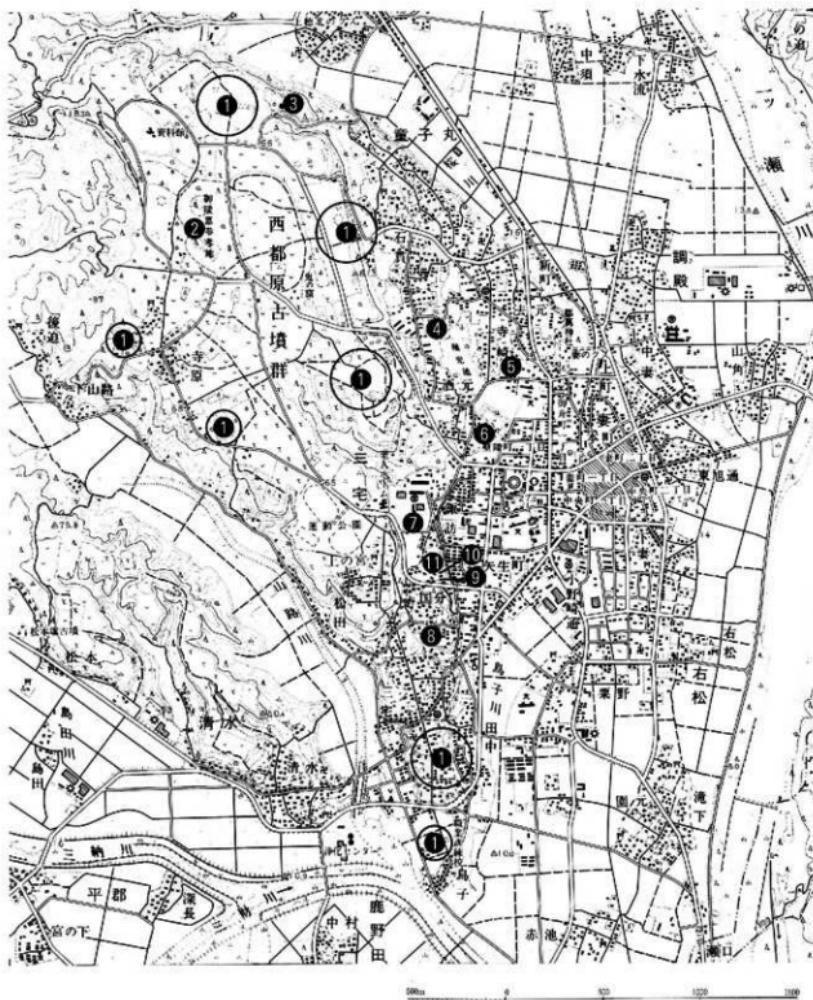
国分第3遺跡の発掘調査については、西都農業協同組合の宅地造成に伴い実施したもので、南に隣接した国分第2遺跡から古墳に寄生的に構築されるタイプの地下式横穴墓が4基検出され、本調査地にもその遺構の存在が想定された。このようなことから、西都農業協同組合と保存について協議を重ねたが、土地の売買契約も済み、分譲地の予約も成されおり、現状保存は困難であると判断した。よって、当該工事によって地下遺構に与える影響は大きいことから、本調査（記録保存）を実施することとなった。

調査は、まず遺構等の遺存状況を確認するためのトレンチを5カ所設定して、その成果を基に本格的な調査を行った。

調査期間は、平成15年6月20日～平成15年9月8日である。

第2節 調査の体制

調査主体	教育長	黒木 康郎
	文化課長	森 康雄
	同 補佐	村岡 満徳
	同 主事	笠瀬 明宏
	同 主事	津曲 大祐
調査庶務	同 主事	鹿嶋 修一
調査員	文化課係長	義方 政幾
調査指導	日高 正晴	(西都原古墳研究所長)
調査作業	井上六雄・緒方タケ子・押川ツル・廻田勉・廻田和子・金丸美保・川野照夫・黒木トシ子・児玉征子・佐伯民孝・椎葉重満・椎葉智佐子・篠原時江・島地美保・杉田ヨシ・閑治代・長谷川クミエ・浜田スミ・疋田はる子・光森スミ子・横山ナオ子・和田厚子	
整理作業	中原昭美・長谷川明美	



1. 特別史跡・西都原古墳群 2. 御陵墓（男狹穗塚・女狹穗塚古墳）
 3. 新立遺跡 4. 堂ヶ嶋第2遺跡 5. 寺崎遺跡（日向國庁跡）
 6. 酒元遺跡 7. 日向國分尼寺跡 8. 日向國分寺跡
 9. 國分第1遺跡 10. 國分第2遺跡 11. 國分第3遺跡

Fig. 1 国分第3遺跡周辺位置図 ($s=1/25,000$)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には、標高50～80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。その台地東側には標高20～30mの南北に延びた中間台地があり、さらに、その下には沖積平野が広がっている。

この西都原台地を中心とした地域には、陵墓参考地として治定されている男狹穗塚・女狹穗塚の巨大古墳をはじめ、前方後円墳30基、方墳1基、円墳278基で構成された特別史跡・西都原古墳群が分布している。また、南九州独自の墓制である地下式横穴墓が現在までに12基、横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされるタイプの酒元ノ上横穴墓も13基確認されている。

このように西都原台地上には数多くの古墳が所在しているが、諸各種開発等に伴う調査の結果、古来から生活が営まれたことが確認されている。縄文時代としては、台地北東端の新立遺跡をはじめ、2号小道路・E区・23支線道路(以上圃場整備に伴う調査)、第10・11・14・65・69地点(以上天地返しに伴う調査)⁽¹⁾などがあり、集石造構に共存して縄文土器等が出土している。弥生時代としては、寺原第1遺跡、2号小道路・8号・33号支線(以上圃場整備)、第39・60・62・69・74地点(以上天地返し)⁽²⁾などがあり、竪穴式住居跡等が検出されているが、その他弥生時代終末から古墳時代初頭の集落群跡が新立遺跡で確認されている。古墳時代としては、27号支線道路(以上圃場整備)から21軒もの竪穴式住居跡が検出され、古墳時代初頭頃には現寺原集落の南側に大集落跡の存在が確認された。古墳時代以降の遺跡としては3号・34号支線道路(以上圃場整備)、第26・53・72地点(以上天地返し)⁽³⁾などがある。

西都原台地東側の中間台地には、5世紀初頭頃の集落跡が確認された酒元遺跡をはじめ、北側の寺崎地区には日向国庁跡⁽⁴⁾、南側には日向国分寺跡や日向国分尼寺跡(推定)⁽⁵⁾などが所在している。

国分第3遺跡は、日向国分寺跡の北方約400mに位置している。隣接して国分第1遺跡・第2遺跡が所在し、特に国分第2遺跡からは本遺跡同様の古墳周溝とその周溝に寄生的に構築した地下式横穴墓が検出されている。また、周囲には西都原第218号墳～第221号墳が分布し、標高は約33.0mで、東側は、西都市街地が一望できる地域で、生活環境にはすばらしい立地条件を有している。

いずれにしても、西都原台地はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向の政治・文化の拠点として栄えた歴史的環境を有する地域であったことを示している。

註

- [1] 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第22集 1996
- [2] 西都市教育委員会「新立遺跡」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第18集 1992
- [3] [1]と同じ
- [4] 西都市教育委員会「市内遺跡発掘調査概要報告書IV～VI」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第28～31・36集 1999～2003
- [5] " " 「寺原第1遺跡他」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第1集 1985
- [6] " " 「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第8集 1989
- [7] 宮崎県教育委員会「寺崎遺跡」「国宝級保存整備基礎調査報告書」2001
- [8] " " 「国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査報告書」V 1996
- [9] 西都市教育委員会「市内遺跡発掘調査概要報告書I～III」「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第23～36集 1996～2003
- [10] 西都市教育委員会「西都原古墳研究所・年報」第16号 2000
- [11] " " 「西都原古墳研究所・年報」第17号 2001

第三章 国分第3遺跡の調査

第1節 国分遺跡のこれまでの調査の成果と概要

国分遺跡は、北は県立妻高等学校のグラウンド（推定日向國分尼寺跡）以南から南は日向國分寺跡までを含む地域であり、これまでに市営国分住宅建設に伴い国分第1遺跡と第2遺跡の調査を行っている。位置的には本遺跡の南側に隣接して国分第2遺跡、さらに、その南側に隣接して国分第1遺跡が所在している。

なかでも、国分第2遺跡は平成12年度西都市教育委員会が主体となり調査を実施し、消失円墳2基とそれぞれの周溝から地下式横穴墓が総計4基、竪穴式住居跡等を確認した。1号消失円墳は直径約14mで、周溝の南側に集中して3基、2号消失円墳は直径約15mで、南西側に1基のみ地下式横穴墓を検出した。

地下式横穴墓は、4基とも平入り構造で、方形ないし梢円形プランである。玄室は最大のものが2号で約4.55m²、最小のものは4号で約1.12m²の規模を有している。屋根構造は1～3号が天井は崩落して不明であるが、4号はアーチ形である。1号は20～30cmの川原石を玄室に敷き、屍床を設けていた。また、2号には玄室の奥壁及び側壁、そして、中央部に排水溝が施されていた。

これら地下式横穴墓には須恵器を主体に副葬品が埋葬されていた。特に、1号は須恵器壺蓋・塚、高坏、耳環、イモガイ製貝輪、環状鏡板付巻、長頸罐など豊富な副葬品を有していた。

また、人骨も遺存状態は悪かったが、1号と2号から確認できた。

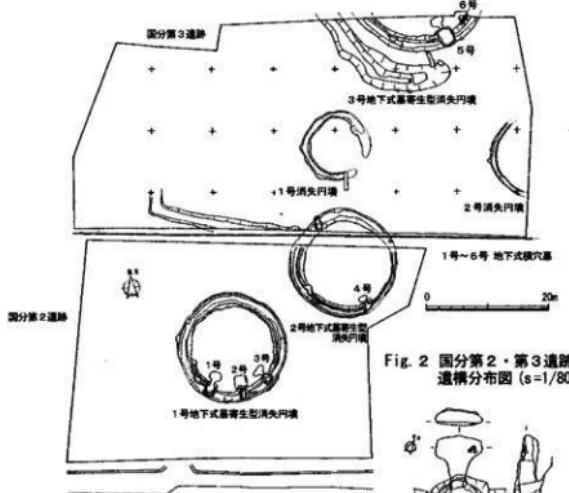


Fig. 2 国分第2・第3遺跡
遺構分布図 (s=1/800)

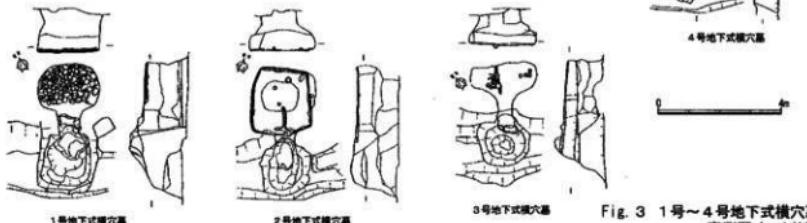


Fig. 3 1号～4号地下式横穴墓
実測図 (s=1/160)

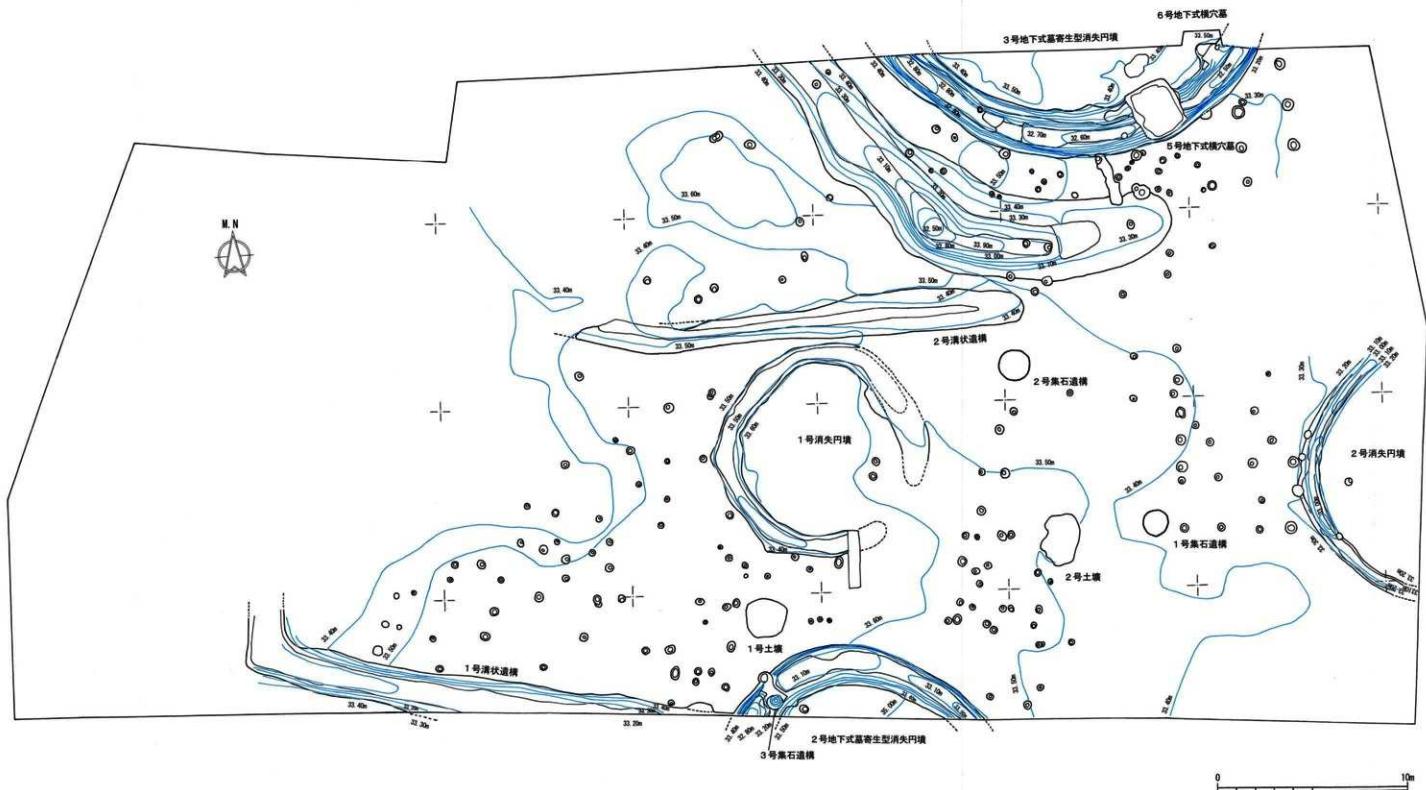


Fig. 4 国分第3遺跡遺構分布図 (s=1/200)

これら地下式横穴墓は、時期的には共伴遺物から、4号が古く6世紀末～7世紀初め（TK209型式併行期）、1～3号が7世紀前葉（TK217型式併行期）頃と推定される。

これらいずれの地下式横穴墓も、周溝内から堅坑が掘削されており、玄室は消失円墳の中央に向かって延びている。また、消失円墳と地下式横穴墓との関係は、周溝がある程度埋まつた段階で堅坑を掘削しているのが確認できることから、古墳が先行して、後で地下式横穴墓が構築されたと思われる。このことについては、『常ヶ嶋第2遺跡』のなかで、「西都原古墳群に祀られた階層よりやや低く、時代的にも若干遅れた者達が祖先の古墳に寄生的につき造ったのではなかろうかと思われる。」と筆者は述べている。⁽⁹⁾

国分第1遺跡は、対象区北側の遺物包含層は削平されていたが、南側で多くのピットと土壙1基が検出された。これら遺構の時期については、北側から造成で押された遺物がかなり混在しており、特定できなかった。遺物は、弥生時代から中世の土師器・須恵器・陶磁器、平安時代前期の壺や瓦などが出土している。

第2節 調査区の設定と概要

調査は、まず遺構及び土層の遺存状況等を確認するために、方2mのトレンチを5ヶ所設定して行った。結果、アカホヤ火山灰層は全体の1/3程度しか残っておらず、かなり、上部が削平されているようであったが、遺構は遺存しているのが確認できた。

本調査は、この試掘調査の結果を基にアカホヤ火山灰層のレベルまで重機により掘削を行い、後は人力により遺構・遺物の検出を実施した。人力による精査の結果、消失円墳、地下式横穴墓、集石遺構、土壙、溝状遺構、柱穴群などを確認することができた。これらを、記録するために10m方のグリッドを設定し、さらに人力で遺構の検出を行った。そして、最終的には消失円墳4基、地下式横穴墓2基、土壙2基、集石遺構3基、溝状遺構2条、柱穴を多數検出することができた。

なお、このなかで消失円墳については、地下式横穴墓と共に存するものを『常ヶ島第2遺跡』に合わせて地下式墓寄生型消失円墳として分けた。そうなると、地下式墓寄生型消失円墳は2基、消失円墳は2基となる。また、同じ国分遺跡として国分第2遺跡からの通し番号（Fig. 2）で取り扱った。よって、国分第3遺跡では消失古墳2基は1号・2号、地下式墓寄生型消失円墳2基は2号・3号、地下式横穴墓2基は5号・6号として報告する。

第3節 遺構と遺物

1. 繩文時代の遺構と遺物

集石遺構

1号集石遺構（Fig. 5）

（1）立地

調査区の東側、5号消失古墳の西8.0mに位置している。東側は台地縁辺部にあたるが、すでにアカホヤ火山灰層は削平されており、ほとんど褐色ローム層となっている。

（2）規模と構造

径約1.40mの円形プランのもので、凹レンズ状の浅い掘込みを有している。礫は角礫が多く、わりと密に集積し、火を受け赤く変色している。底部に配石は見られない。

（3）出土遺物

遺構内から無文土器がわずかに1点のみ出土している。時期的には、検出状況や無文土器を伴うことなどから早期でも古い時代に比定される。

2号集石遺構 (Fig. 5)

(1) 立地

調査区の東側、1号集石遺構の北西11.5mで、1号消失円墳の東5.0mに位置している。

(2) 規模と構造

径約1.60mの円形プランのもので、凹レンズ状の浅い掘込みを有しているが、1号集石遺構より深い。礫は角礫が多く、火を受け赤く変色している。礫はあまり集積されておらず、底部に配石は見られない。掘込みは褐色ローム層からである。

(3) 出土遺物

遺物は遺構内及び周辺からも全く出土していない。時期的には検出状況等から1号集石遺構と同じ縄文時代早期のものと推定される。

3号集石遺構 (Fig. 5)

(1) 立地

2号地下式墓寄生型消失円墳の周溝内に位置し、その周溝によって上部分が削平されている。

(2) 規模と構造

上部分は周溝を構築する際に削平され、下部分のみ遺存している。径0.9mの円形プランで、U字状の深い掘込みを有し、底部には配石を施している。礫は角礫が多く、密に集積されている。

(3) 出土遺物

遺物は周辺の周溝内から貝殻条痕文土器系の土器が出土しており、縄文早期のものと推定される。

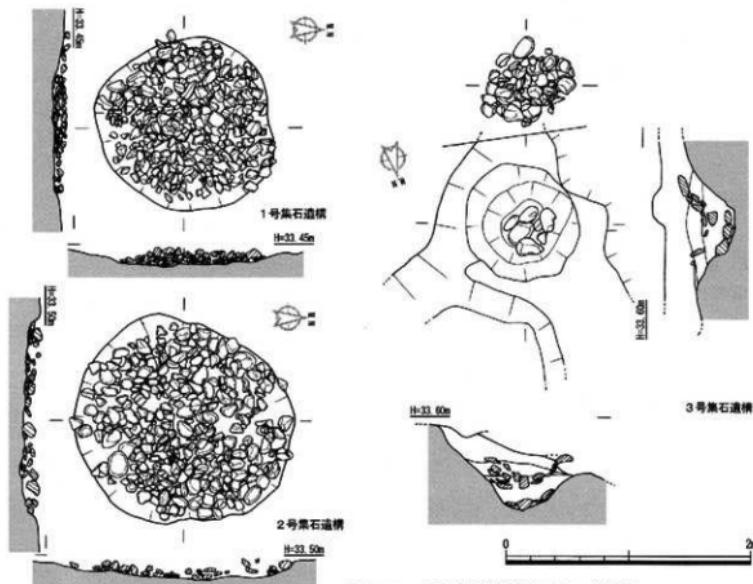


Fig. 5 集石遺構実測図 (s=1/40)

2. 古墳時代の構造と遺物

地下式墓寄生型消失円墳

2号地下式墓寄生型消失円墳 (Fig. 6 ~ 8)

(1) 立地

調査区の南側中央部に位置している。本墳はFig. 2でも分かるように国分第2遺跡から検出した2号地下式墓寄生型消失円墳の北側1/3で、検出面はアカホヤ火山灰層である。国分第2遺跡の南側部分は市営国分住宅建設の際、その工事によって一部分を壊されていたが、国分第3遺跡の北側部分は現状のまま遺存していた。

(2) 規模と構造

本墳は、図面上で復元すると南北約13.8m、東西14.3mの消失円墳で、周囲に幅1.60~2.20m・深さ0.46~0.53mの周溝が全周している。主体部の構造については不明である。周溝の南側には本墳の中央部に向かって地下式横穴墓1基（国分第2遺跡 4号地下式横穴墓）が穿たれている。

(3) 山上遺物

遺物は、土師器が多く65点、そして、須恵器6点・縄文土器2点・瓦12点・すり石1点などが含まれている。このなかで、縄文土器は貝殻条痕文土器系のもので3号集石遺構に共伴するものと思われる。また、すり石も同時期のものと推定される。土師器は、塊・高台付塊・皿が主体で、国分第1遺跡で多量に検出されたものと同じ平安時代前期頃のものと思われる。また、須恵器については、本墳に關係ありそうなものを抽出して2点を掲載した。

1・2いずれも甕で、1は肩部片、2は胴下部片である。なお、これら遺物の詳細については、今後のものも含めて、Tab. 1出土遺物観察表を参照していただきたい。

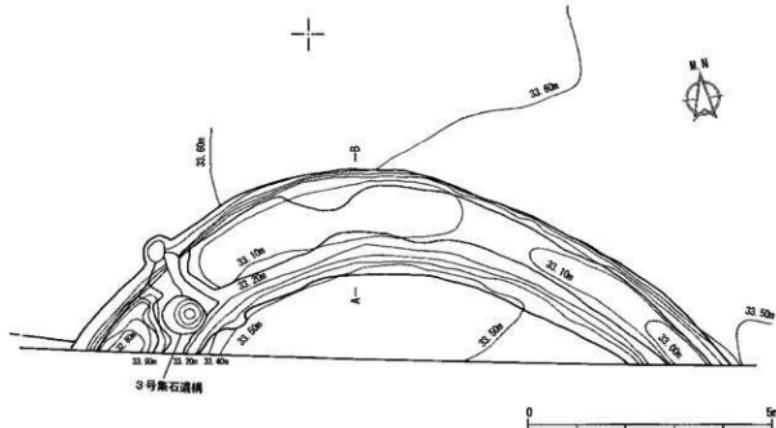


Fig. 6 2号地下式墓寄生型消失円墳実測図 (s=1/100)

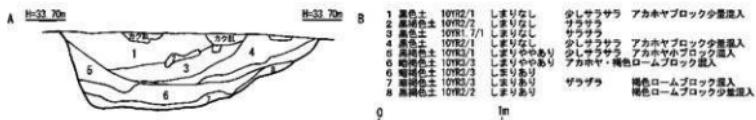


Fig. 7 2号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図 (s=1/40)



Fig. 8 2号地下式墓寄生型消失円墳周溝内出土遺物実測図 (s=1/4)

3号地下式墓寄生型消失円墳 (Fig. 9~11)

(1) 立地

本墳は対象区の北西側に位置している。上部はかなり削平されており、アカホヤ火山灰層は遺存していない、検出面は褐色ローム層である。

(2) 規模と構造

本墳は二重周溝を有するタイプであるが、残念ながらそのほとんどが対象区外であり、南側1/3程度を検出した。墳丘は現存径(東西)約15.2mである。内側の周溝は幅1.95~2.40m・深さ0.70~0.83mで全周すると思われる。外側の周溝は幅2.80~5.20m・深さ0.22~0.69mの馬蹄形である。南東部が陥橋となっており、それを渡った正面の内側周溝に地下式横穴墓2基(5号・6号)が穿たれている。いずれも本墳の中央部に向かって掘削されている。

(3) 出土遺物

外側周溝では、土師器が921点と圧倒的に多く全体の98%を占めている。器形は塊が多く、高台付塊や壺が含まれている。その他、須恵器15点・瓦3点が出土しているが小片である。

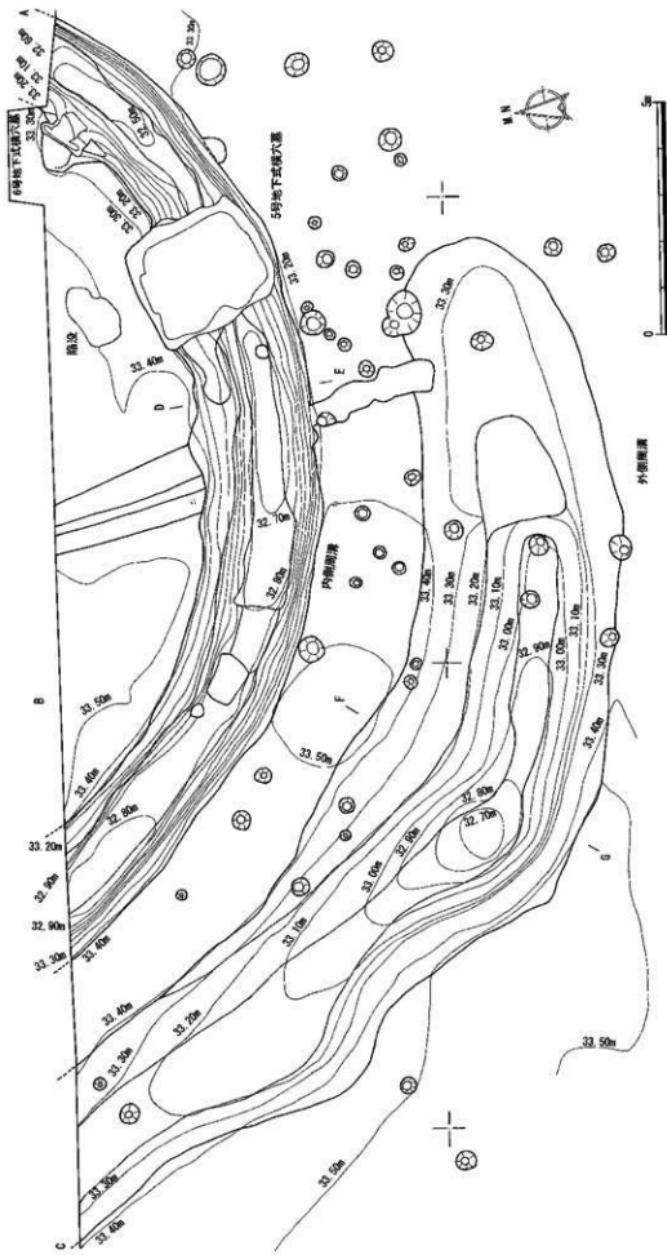
内側周溝では、須恵器がわりと多く63点、その他、土師器171点・陶磁器1点・瓦片4点・石鐵1点・磨製石斧1点が出土している。

須恵器は、壺の破片が多く、しかも小片である。これらの中から選別を行い、本墳に関連したもので、器形等が判別できる代表的なものを図化した。

また、土師器については特に外側周溝から多量に出土しているが、当初は周溝ではなく竪穴式住居跡が重複しているのではということで作業を進めた。しかし、結果は周溝で、その中に土師器が多量に混入していることが判明した。これら土師器の量から察するに周辺地域には大集落跡の存在が想定される。時期的には2号地下式墓寄生型消失円墳同様平安時代前期のものと推定されるが、そのなかの4点を本墳とは関係ないが、参考までに掲載した。

3は坪身で、口縁部復元径11.3cmを計る。4は口縁部が外反する大壺の口縁部と胴上部片で、2つは同一個体である。口縁部復元径25.0cmを計る。5は短頸壺の肩部と胴下部片で、これも胴一個体である。6~8は土師器塊で、7・8は底部端が外にはみ出すタイプのものである。9は土師器高台付塊で、高台の高さ1.1cmを計る。いずれも、ヘラ切り底である。

Fig. 9 3号地下式墓室生型消失円筒实测图 ($\times 1/100$)



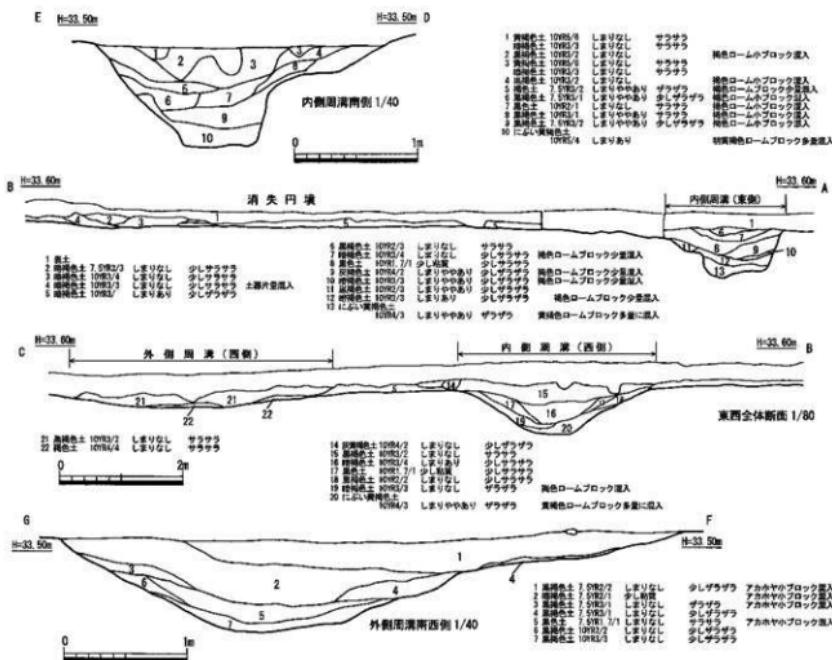


Fig. 10 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面図 ($s=1/40, 1/80$)

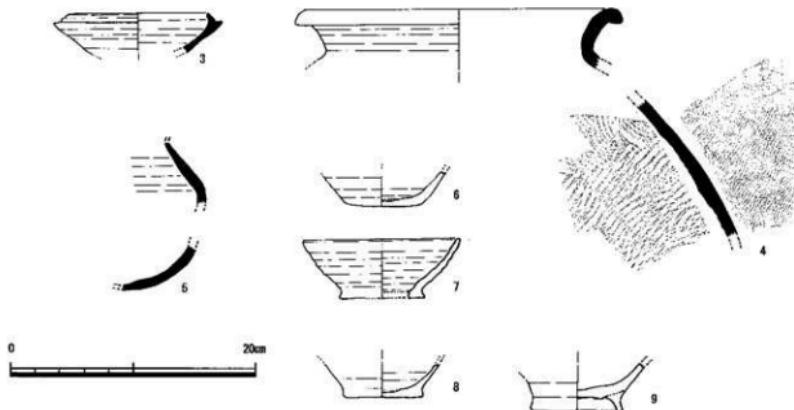


Fig. 11 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝内出土遺物実測図 ($s=1/4$)

消失円墳

1号消失円墳 (Fig. 12~14)

(1) 立地

本墳は対象区の中央部で、2号と3号地下式墓寄生型消失円墳の中間に位置している。検出面はアカホヤ火山灰層である。

(2) 規模と構造

馬蹄形の周溝を有する消失円墳で、南西部に陸橋を設けている。墳丘の径は南北9.5m・東西8.5mを計る。周溝は幅1.05~1.60m、深さ0.17から0.32mであるが、両サイドの古墳の周溝に比べてかなり狭く浅い。墳丘部ではなく、主体部は不明である。

(3) 出土遺物

遺物は、土師器20点・須恵器26点・瓦片1点が出土している。土師器は壺がほとんどであるが、高杯なども含まれている。須恵器は甕形土器の破片で、北西部にわりと集中して出土している。

10は土師器壺身で、上師器では唯一のものである。ヘラ磨きで仕上げられていが、器面風化が著しい。11・12は壺蓋で、11は小片で、12は口縁部が欠損している。13は壺身で、口縁部復元径12.5cmを計る。口縁部は薄く、長く傾斜角が大きいことから、本遺跡の須恵器の中では一番古くMT15~TK

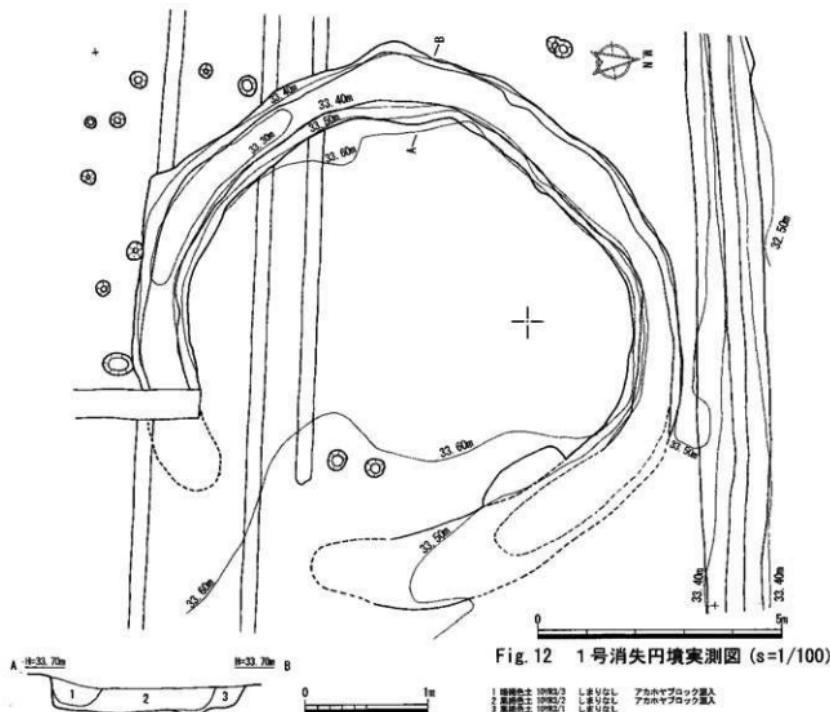


Fig. 13 1号消失円墳周溝土層断面図 (s=1/40)

10型式併行期に対応される。14は大甕で、肩部から胴上部と胴下部片である。胴一個体で、格子目叩きが施されている。15は土師器高杯で、ほぼ完形である。口縁部径20.6cm、脚裾復元径13.9cmを計る。ヨコナデ後ヘラ磨きが施されているが器面の風化が著しい。

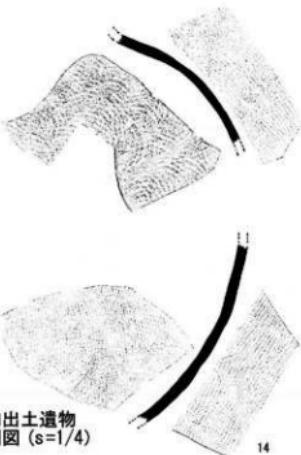
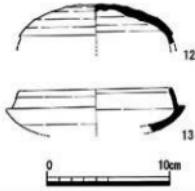
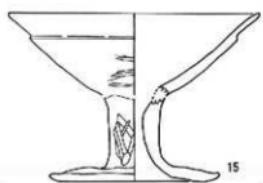


Fig. 14 1号消失円墳周溝内出土遺物
実測図 ($s=1/4$)

2号消失円墳 (Fig. 15)

(1) 立地

対象区の東端中央部で、1号消失円墳の東約30mに位置している。検出面は褐色ローム層である。

(2) 規模と構造

検出したのは全体の西側 $1/2$ 程度で、東側部分は対象区外にあるが、その先約3mは断崖であることから、すでに本墳のほとんどは崩落して消滅していると思われる。墳丘は、東西は不明であるが、南北は復元すると約12mの消失円墳である。周溝は幅0.85~1.05m・深さ0.14~0.21mで、1号消失古墳よりかなり狭く深い。

(3) 出土遺物

遺物は、周溝内に掘り込まれている後世の柱穴等に関連したものののみで、本古墳に関連したものは全く出土していない。よって、残念ながら時期的なことは不明である。

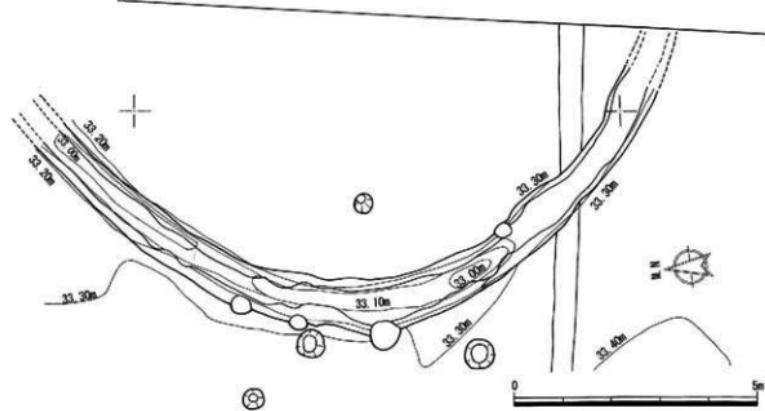


Fig. 15 2号消失円墳実測図 ($s=1/100$)

地下式横穴墓

5号地下式横穴墓 (Fig. 16~18)

(1) 立地

3号地下式墓寄生型消失円墳の周溝南西部に堅坑が位置し、墳丘中央部に向かって玄室が所在している。堅坑は黄褐色土 (Fig. 17 第I層) から、玄室は第V~VII層に掘り込まれている。

(2) 規模と構造

1) 堅坑

堅坑は、長軸3.03m・短軸2.50m・深さ1.27mを計る長方形プランである。堅坑埋土は中央部に後世の柱穴 (1~11層) が掘り込まれているものの、18層に分層できた。下降面は17層上面と16層下面で確認できる。17・18層が初葬時のもので、15・16層が追葬時の埋土と思われる。

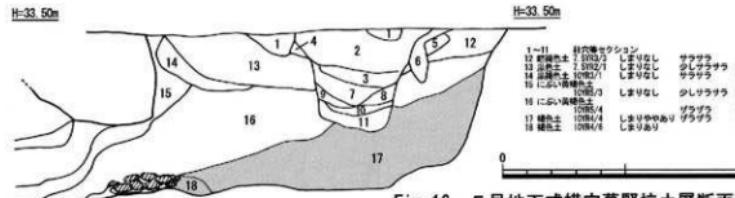


Fig. 16 5号地下式横穴墓堅坑土層断面図 (s=1/40)

2) 閉塞施設

閉塞は川原石閉塞で、羨門に8~20cmの石が高さ0.25mに積まれている。粘土等による目張りは確認できなかった。閉塞施設の範囲は幅0.80m・奥行き0.80mで、床面からじかに積み上げられている。これは初葬時のもので、上部は追葬時に抜取り、そのまま玄室内の屍床として使用している可能性が示唆される。追葬時の閉塞方法は不明であるが、堅坑断面から見て取れる状況では堅坑埋土が一気に羨門側に流れ込んでいるなど、板閉塞であった可能性が高い。

3) 玄室

玄室は平入り横長楕円形プランで、奥行1.35m・幅2.28m・高さ不明、床面積約2.8m²を有している。天井は陥没しているが、遺存しているところから復元するとドーム形と思われる。また、左側壁から右側壁にかけて2/3 (幅約1.5m)、奥壁から前壁側にかけて2/3 (奥行0.95m) の範囲に川原石による屍床が設けられていた。石の大きさは閉塞石と同じく8~20mで、わりと雑に充填されている。この屍床に埋葬された人の頭位は副葬品の出土状況等から右側壁のほうであると思われる。また、この屍床は前述したように追葬時に設けられた可能性を示唆しており、この初葬と追葬との関係については後で論述する。本地下式横穴墓の主軸方位はN-19°-Wで、全長5.24mを計る。羨門部は幅0.82m・長さ1.08m・高さ0.62mで断面は蒲鉾形である。

(3) 出土遺物

遺物は玄室内を中心に壺蓋・壺身・平瓶などの須恵器をはじめ鐵鏃や直刀などの鉄製品が出土している。出土状況は、屍床の上で左側壁周辺と屍床ではない右側壁周辺の2カ所に集中している。屍床に埋葬されている人の頭位を右側とすると、左脇腹に直刀、両足外側に壺蓋や壺身が副葬されていたことになる。平瓶及び刀子や鐵鏃などは右側壁周辺から出土している。18~19は壺蓋で、口縁部径11.5~12.6cm、いずれも完形で一文字のヘラ記号が施されている。20~21は壺身で、口縁部径10.4~11.0cm、21には一文字のヘラ記号が施されている。22は短頸壺で、口縁部径8.9cm・器高

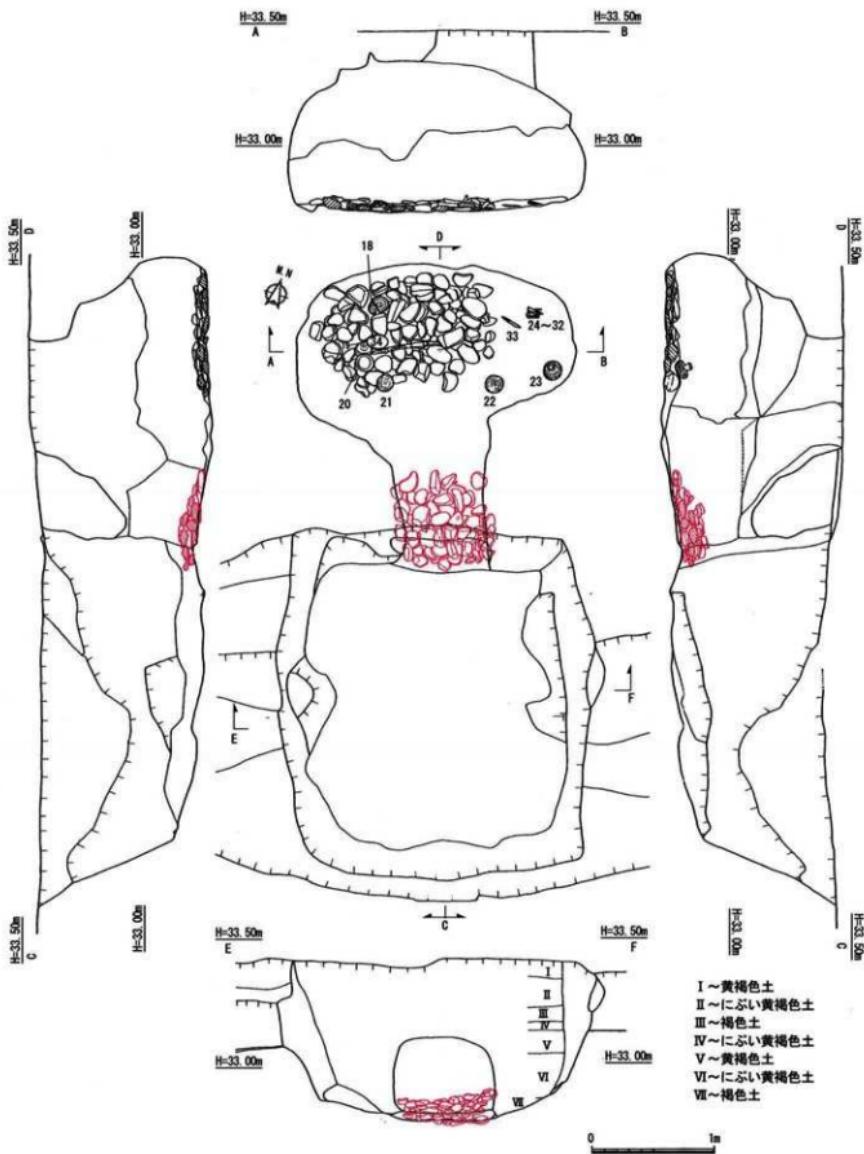


Fig. 17 5号地下式横穴墓実測図 (s=1/40)

10.2cmを計る。口縁部にヘラ記号が施されている。23は平瓶で、口縁部径5.9cm・器高13.2cmを計る。肩部には自然釉がかかり、胴部はカキ目が施され、底部は回転ヘラ削りが行われている。24・25は三角形透しを有する方頭鎌で、鎌身部から茎部、いずれも木質部が部分的に残っている。25は現存長8.5cm、26は現存長9.2cmを計る。27～33は方頭鎌で、27は現存長9.0cmで鎌身部から茎部、葛で巻かれた



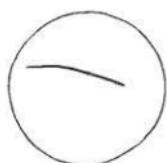
16



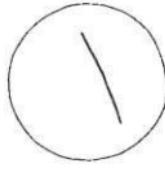
17



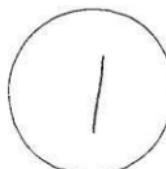
21



18



19



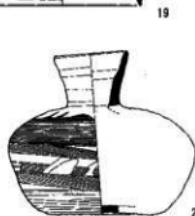
20



10cm



22



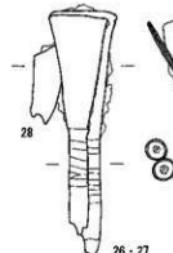
23



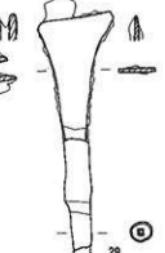
24



25



26・27



29



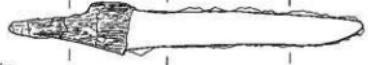
30



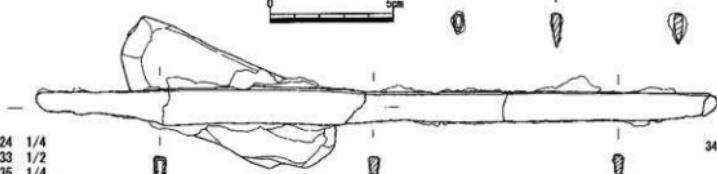
31



32



33



34

16～24 1/4
25～33 1/2
34～35 1/4
竪坑内 16～17
玄室内 18～34

Fig. 18 5号地下式横穴墓竪坑及び玄室内出土遺物実測図 (s=1/2, 1/4)

木質部が残っている。28は現存長10.1cmで、27同様鐵身部から茎部、葛で巻かれた木質部が残っている。29は現存長3.2cmで鐵身部のみ遺存している。30は現存長9.7cm、31は現存長6.7cm、鐵身部から茎部、木質部が残っている。32は現存長6.8cmで、葛で巻かれた木質部が残っている。33は長頸鎌で、幅1.9cm、鐵身部のみ残っている。34は刀子で、現存長14.5cm、刀部幅0.5~1.6cm、鉛幅0.3~0.4cm、木質部が残っている。35は直刀で、茎は屍床礫に銷が溶けそのまま固まって付着している。現存長は55.5cmで、

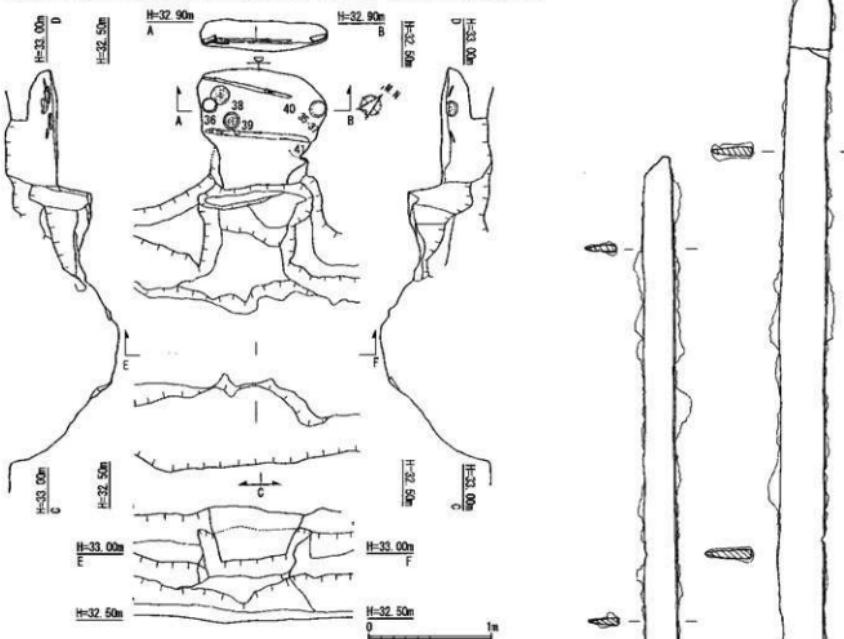


Fig. 19 6号地下式横穴墓実測図 ($s=1/40$)

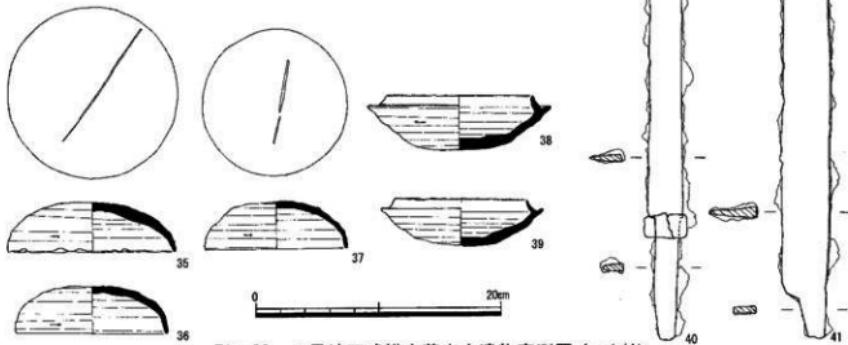


Fig. 20 6号地下式横穴墓出土遺物実測図 ($s=1/4$)

刀身から茎が残り、刀身は平造で丸棟である。なお、16・17は堅坑内から出土したもので、16は形状及び灰被りの状況から須恵器ハソウの口縁部と思われ、推定口縁部径16.6cmを計る。17は鉄製の鐔で、卵型である。いずれも、出土状況から、追葬時に持ち出されたものと思われる。

6号地下式横穴墓 (Fig. 19・20)

(1) 立地

5号地下式横穴墓の北西約4mで、3号地下式墓寄生型消失円墳の周溝内に堅坑が位置している。墳丘中央部に向かって玄室が所在している。玄室は浅く、第II・III層 (Fig. 17) に掘り込まれている。

(2) 規模と構造

1) 堅坑

当初堅坑として取り扱わず、あまり重要視しないまま周溝と同レベルで掘削したこと、そして、堅坑があまりにも小さく、周溝内に収まつたこと等から、規模を明確にすることはできなかった。ただし、周溝上面では約2.1m×1.8mの範囲で周溝内埋土に変化が見受けられたことから、凡そこれが堅坑の規模と思われる。

2) 閉塞施設

閉塞の方法は、羨門入口が一段低く、そこに板をはめ込んだと思われる溝が見受けられることから板閉塞である。溝の幅は0.14m・長さ0.94mを計る。羨門部は天井部分のほとんどが崩壊しており、幅0.55m・長さ0.23mを計る。

3) 玄室

玄室は平入りで、平面プランは右壁側が楕円形、左壁側は隅丸方形形状になっている。奥行0.72m・幅1.03m・高さ不明、床面積0.4m²の規模を有している。天井は陥没しているが、復元するとドーム形と思われる。なお、主軸方位はN-21°-Eで、全長は堅坑が分からず不明である。

(3) 出土遺物

玄室内から須恵器坏蓋及び坏身、直刀2振が出土している。出土状況は、玄室の奥壁と入口に切先を右にして並行に、その間に左壁側に3点（坏蓋1・坏身2）、右壁側2点（坏蓋2）が副葬されている。35～37は坏蓋で、35は口縁部径13.7cm、36は口縁部径12.4cm、37は口縁部径11.6cmを計る。35・37には一文字のヘラ記号が施されている。38・39は坏身で、38は口縁部径12.0cm、39は口縁部径10.9cmを計る。40直刀で、現存長71.1cm、刀身から茎が残っている。41も直刀で、現存長は86.1cm、刀身から茎の一部が残っている。40・41ともに平造で丸棟である。40は刀区と棟区があり、41は刀区のみで棟区はない。

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

土壙 (Fig. 21・22)

2号地下式墓寄生型消失円墳の北西部に隣接して1号土壙、北東約10mに2号土壙が位置している。1号土壙は長軸2.30m・短軸1.94m・深さ0.33mの長楕円形プランを呈している。遺物は、土師器214点・須恵器3点・繩文土器1点・陶磁器4点・瓦1点が出土している。主体を占めているのは土師器で、壺がほとんどである。42～44は土師器碗で、いずれも両面ヨコナデ調整で、ヘラ切り底である。45は土師器高台付碗で、斜めの高台の高さは1.1cmを計る。ヨコナデ調整で、丁寧に仕上げている。

2号土壙は、長軸2.60m・短軸1.83m・深さ0.13mの長楕円形プランを呈しているが、かなり1号と比べて浅い。遺物も少なく土師器12点と石錐1点が出土したのみである。ほとんどが小片で、そのなかの3点を圓化した。46は土師器甕、47・48は土師器碗の破片で、いずれもヨコナデ調整で仕上げている。

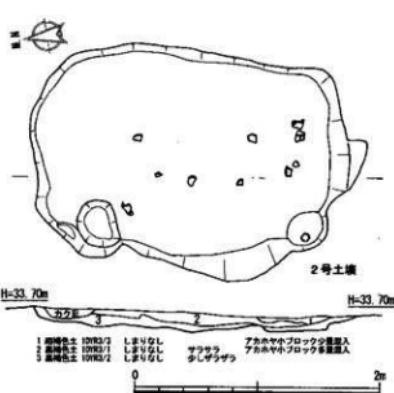
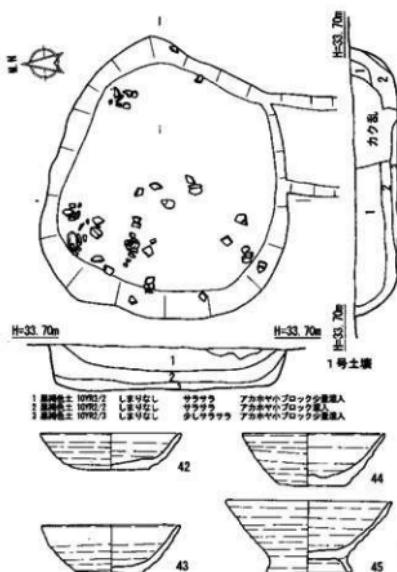


Fig. 21 土壌実測図 ($s=1/40$)

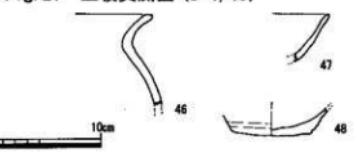


Fig. 22 土壌出土遺物実測図 ($s=1/4$)

溝状遺構 (Fig. 4)

対象区の西側に1号溝状遺構、中央部に2号溝状遺構が位置している。1号溝状遺構は幅約1.8m・長さは現状で約30m・深さ約0.4mを計る。直線的に延び、西側でL字形に屈曲している。

遺物は、土師器279点をはじめ須恵器12点・陶磁器6点・瓦2点・石錐1点・土錐1点が出土地している。土師器は塊・高台付塊がほとんどで、須恵器は鉢形土器や壺形土器、陶磁器には青磁塊などが含まれている。2号溝状遺構は東西に直線的に延びているが、これは畑地と畑地の間に排水のために設けられたもので、近代から現代にかけてのものと推定される。

柱穴群 (Fig. 4・23)

対象区の中央から東側にかけて数多く検出されており、掘立柱建物跡の存在を意識しながら検出に努めたが、確実に特定するには至らなかった。しかし、3号地下式墓寄生型消失円墳の東側と2号消失円墳の西側にはそれらしき柱穴が規則的に並んでおり、掘立柱建物跡の存在は想定できる。

遺物は、各柱穴から土師器131点が出土している。塊がほとんどであるが、高台付塊もわりと多い。49・50は土師器塊で、ヘラ切り底、ヨコナデ調整で仕上げている。51・52は土師器高台付塊で、底部片である。ヨコナデ調整で、ヘラ切り底である。時期は共伴遺物から9世紀～10世紀頃の平安時代前期に比定する。

註 (1) 西都市教育委員会『紫ヶ嶋第2遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第33集 2003 筆者 篠瀬明宏
 (2) (1)の中で、消失円墳に地下式横穴墓が寄生しているものを、地下式墓寄生型消失円墳と称して報告している。

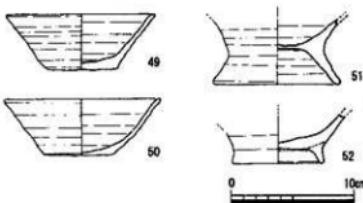


Fig. 23 柱穴内出土遺物実測図 ($s=1/4$)

Tab. 1 出土遺物観察表

2号地下式墓寄生型消失円墳

No.	器種	残存率	法 量	調 整		色 調	崩 上	焼 成	ハラ記号
			口径/受部径/底径/脚 標高/脚間最大径/高さ (cm)	外面/内面	外面	内面			
1	須恵器/甕	破片	-/-/-/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ・同心円状当て具痕	灰色 5Y5/1	灰色 5Y5/1	緑かい、1mm前後の長石含む、黒粒子混入	堅敏	
2	須恵器/甕	破片	-/-/-/-/-/-	輻方向叫き一横方向で一定間隔の方 キ目・同心円状当て具痕	灰色 5Y4/1	灰色 5Y4/1	緑かい、1mm前後の長石含む、黒粒子混入	堅敏	、

3号地下式墓寄生型消失円墳

3	須恵器/环身	1 / 5	(11.3) / (13.8) / -	回転ナデ/回転ナデ	灰色 7. SY5/1	灰色 7. SY5/1	緑かい、1mm前後の長石含む、黒粒子混入	堅敏	
4	須恵器/大甕	口縁部	(25.0) / -/-/-/-	回転ナデ、明き一部ヨコナデ/回 転ナデ・同心円状当て具痕	灰色 N5/	灰色 7. SY5/1	緑かい、1~2mm前後の長石含む、黒粒子混入	堅敏	
5	須恵器/短頭 蓋	胴下部	-/-/-/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ	灰色 10Y6/1	灰色 7. SY5/1	緑かい、1~3mm前後の長石含む、黒粒子混入	堅敏	
6	土師器/碗	胴部~底部	-/-/6.4/-/-	ヘラ切り底→ナデ、ヨコナデ/ヨコ ナデ	に5Y5/褐色 7. SYR7/4	褐色 7. SYR6/7	緑かい、褐色粒子混入	良好	
7	土師器/碗	1 / 2	(12.9) / -(7.0) / - /-/4.9	ヨコナデ/ヨコナデ	橙 SYR6/S	橙 2. SYR6/S	緑かい、褐色粒子混入	やや不良	
8	土師器/碗	胴部~底部	-/-/6.5/-/-	ヘラ切り底→ナデ、ヨコナデ/ヨコ ナデ	灰白色 SY7/1	灰白色 5Y7/1	緑かい、白雲母・黒粒子混入	やや不良	
9	土師器/高台 付塊	胴部~底部	-/-/7.4/-/-	ヨコナデ/ヨコナデ 画面との磨食が著しい	に5Y5/褐色 7. SYR7/4	褐色 7. SYR7/4	灰い、2mm前後の石英含む	やや不良	

1号消失円墳

10	土師器/环身	受部破片	-/-/-/-/-/-	ヨコナデ→磨き/ヨコナデ→磨き	に5Y5/褐色 SYR7/4	に5Y5/褐色 7. SYR7/4	緑かい、褐色粒子・白雲母 混入、長石・石英含む	良好	
11	須恵器/环蓋	口縁部	-/-/-/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ	灰色 7. SY4/1	灰色 7. SY4/1	少し荒い、1~2mmの長石含む	堅敏	
12	須恵器/环蓋	口縁部欠損	-/-/-/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ	灰色 7. SY4/1	黄白色 2. SY4/1	緑かい、1~2mmの長石含む	堅敏	
13	須恵器/环身	口縁部~胴部	(12.5) / -/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ	灰色 7. SY4/1	灰色 7. SY4/1	少し荒い、1~3mmの長石含む	堅敏	
14	須恵器/大甕	胴部	-/-/-/-/-/-	菱格子目タキ/同心円状当て其痕	黄灰色 2. SY6/1	黄灰色 2. SY6/1	緑かい、1~2mmの長石含む、黒粒子混入	堅敏	
15	土師器/高坏	ほぼ完形	20.6 / -/-/(13.9) /-/13.8	ヨコナデ→ヘラ磨き/ヘラ磨き外側 及び特に内面は風化著しい	に5Y5/褐色 7. SYR7/3	浅褐色 10YR8/3	少し荒い、褐色粒子混入風 化、白雲母混入	やや不良	

5号地下式横穴墓

16	須恵器/小ソウ	破片	-/-/-/-/-/-	回転ナデ/回転ナデ	灰色 7. SY5/1	灰色 7. SY5/1	緑かい、1~2mmの長石含む、黒粒子混入	堅敏	
18	須恵器/坪蓋	破片	12.6 / -/-/-/- /-/4.0/	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ	黄灰色 2. SY5/1	黄灰色 2. SY5/1	少し荒い、1~2mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	○
19	須恵器/坪蓋	破片	12.6 / -/-/-/- /-/4.6	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ、中央部ナデ	灰色 7. SY5/1	灰色 7. SY5/1	少し荒い、1~2mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	○
20	須恵器/环身	破片	11.0 / 13.4 / -/-/- /-/3.8/	回転ナデ/回転ナデ、中央部ナデ	黄白色 2. SY5/1	黄白色 2. SY5/1	少し荒い、1~4mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	○
21	須恵器/环身	破片	10.4 / 13.2 / -/-/- /-/3.7	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ、中央部ナデ	灰色 SY4/1	灰色 SY4/1	緑かい、1~2mmの長石含 む、黒粒子混入	堅敏	
22	須恵器/短頭 蓋	破片	8.9 / -/-/-/-/14.1 /-/10.2	回転ナデ/回転ナデ、中央部ナデ	灰色 7. SY5/1	灰色 7. SY5/1	緑かい、1~2mmの長石含 む、黒粒子混入	堅敏	○
23	須恵器/平盤	破片	5.9 / -/-/-/-/15.3 /-/13.2	回転ナデ、カキ目、胴部下部~底部 は回転ヘラ削り	灰色 N4/	灰色 N3/	少し荒い、1~4mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	○

6号地下式横穴墓

35	須恵器/坪蓋	破片	13.7 / -/-/-/-/- /-/4.1	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ、中央部ナデ	灰色 N6/	灰色 N6/	荒い、1~7mmの長石含む、 黒粒子混入	堅敏	○
36	須恵器/坪蓋	破片	12.4 / -/-/-/-/- /-/3.9	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ、中央部ナデ	灰色 N6/	灰色 N6/	少し荒い、1~4mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	
37	須恵器/环身	破片	12.0 / 15.1 / -/-/- /-/4.5	回転ナデ、ヘラ切り底→ナデ/回 転ナデ、中央部ナデ	灰色 7. SY6/1	灰色 7. SY6/1	少し荒い、1~4mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	
38	須恵器/环身	破片	10.9 / 13.3 / -/-/- /-/3.8	回転ナデ/回転ナデ	灰色 N6/	灰色 N6/	少し荒い、1~3mmの長石含 む、黒粒子多量に混入	堅敏	

1号土壤

No.	器種	残存率	法 盆 口径/受部厚/底径/脚 被覆/脚部最大径/器高 (cm)	調 整		色 調		胎 土	焼 成	ヘラ 記号
				外面/内面		外面	内面			
42	土師器/塊	1/2	(11.5) / - / 6.5 / - / - / 3.0	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	細かい、褐色粒子・角閃石 混入	やや不良		
43	土師器/塊	1/3	11.2 / - / 5.4 / - / - / 4.1	ヨコナデ、ヘラ切り底/ヨコナデ風 化著しい	にぶい褐色 SYR5/4	にぶい褐色 SYR5/4	荒い、1mm前後の小石多量 に含む、褐色粒子混入	良好		
44	土師器/塊	4/5	11.6 / - / 5.8 / - / - / 4.4	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ	根 SYR6/6	根 SYR6/6	少し荒い、白雲母・角閃石 混入	やや不良		
45	土師器/高台 付属	5/6	13.6 / - / 7.0 / - / - / 6.0	ヨコナデ、ヘラ切り底/ヨコナデ	根 SYR6/6	根 SYR6/8	少し荒い、白雲母・角閃石 混入	良好		
46	土師器/塊	破 片	- / - / - / - / - / - / - / - / - / -	ヨコナデ/ヨコナデ風化著しい	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 SYR6/6	荒い、1~2mm前後の小石褐 色粒子混入	やや不良		
47	土師器/塊	破 片	- / - / - / - / - / - / - / - / - / -	/ヨコナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	荒い、2~3mm前後の小石褐 色粒子・白雲母混入	良好		
48	土師器/塊	底 部	- / - / 6.6 / - / -	ヨコナデ、ヘラ切り底/ヨコナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	荒い、1~2mm前後の小石褐 色粒子混入	やや不良		

2号土壤

49	土師器/塊	3/5	12.1 / - / 6.0 / - / - / 4.1	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	細かい、1mm前後の褐色粒 子混入	良好		
50	土師器/塊	1/3	(12.8) / - / 5.9 / - / - / 4.6	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	細かい、1mm前後の褐色 粒子混入	良好		
51	土師器/高台 付属	底 部	- / - / 10.4 / - / -	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	荒い、1~2mm前後の小石褐 色粒子・白雲母混入	良好		
52	土師器/高台 付属	底 部	- / - / 7.5 / - / -	ヨコナデ、ヘラ切り底→ナデ/ヨコ ナデ 風化著しい	にぶい褐色 7. SYR7/4	にぶい褐色 7. SYR7/4	細かい、1mm前後の小石褐 色粒子混入	やや不良		

() 内の数字は反転復元

鉄 製 品

No.	出 土 地 点	名 称	現存長	刃身長/柄長/鍔身長/刃部長/幅/厚さ/頂部長/茎部長/(上角形透幅・長さ)
17	5号地下式横穴墓竪穴	鍔	5.7	- / - / - / - / 3.7 / 0.3 / - / -
25	5号地下式横穴墓	方頭鎌(三角形透)	8.5	- / - / 5.7 / 2.7 / 0.9~2.7 / 0.1~0.6 / - / 2.8 / (0.8 + 1.3)
26	5号地下式横穴墓	方頭鎌(三角形透)	9.2	- / - / 5.5 / 2.9 / 0.8~2.9 / 0.2~0.3 / - / 3.7 / (0.8 + 1.3)
27	5号地下式横穴墓	方頭鎌	9.0	- / - / 4.6 / 2.4 / 0.9~2.4 / 0.3 / - / 4.4
28	5号地下式横穴墓	方頭鎌	10.1	- / - / 5.2 / 2.8 / 0.8~2.8 / 0.3~0.4 / - / 4.9
29	5号地下式横穴墓	方頭鎌	3.2	- / - / 3.2(現存長) / 2.4 / 0.9~2.4 / 0.2 / - / -
30	5号地下式横穴墓	方頭鎌	9.7	- / - / 5.0 / 3.2 / 0.9~3.2 / 0.2~0.3 / - / 4.7
31	5号地下式横穴墓	方頭鎌	6.7	- / - / 4.6 / 2.4 / 0.9~2.4 / 0.2~0.4 / - / 2.1(現存長)
32	5号地下式横穴墓	方頭鎌	6.8	- / - / 4.4 / 2.0(残存部) / 1.2~2.1 / 0.2~0.3 / - / 2.4(現存長)
33	5号地下式横穴墓	長頭鎌	4.9	- / - / 4.9(残存部) / 0.7~4.9 / 1.7 / 0.2~0.4 / - / -
34	5号地下式横穴墓	刀子	14.5	9.6 / 4.9(現存長) / - / - / 0.5~1.5 / 0.3~0.4 / - / -
35	5号地下式横穴墓	直刀	55.5	45.5 / 10.5 / - / - / 0.6~1.0 / 0.7~1.0(峰部分) / - / -
40	6号地下式横穴墓	直刀	71.1	60.8 / 10.3 / - / - / 2.3~3.0 / 0.5~0.6(峰部分) / - / -
41	6号地下式横穴墓	直刀	86.1	82.8 / 3.3 / - / - / 3.4~3.9 / 0.6~0.8(峰部分) / - / -

第IV章 まとめ

遺構の時期について

本遺跡からは、縄文時代早期の集石遺構3基をはじめ、消失円墳4基（内2基は地下式墓寄生型消失円墳）、地下式横穴墓2基、土塘2基、溝状遺構2条、柱穴群を検出した。

この中で、消失円墳については、埋葬施設を有していたと思われる墳丘が削平され、周溝の中に後世の遺物が混在していることから、これら古墳が築造された年代を断定するのは難しいが、1号消失円墳の周溝内から本遺跡の中で最も古い須恵器坏身が出土しており、それを陶邑窯跡群を中心とした編年と対比するとMT15～TK10型式併行期に対応される。周辺にこの遺物に対応した遺構はなく、6世紀前半～中葉に築造された古墳である可能性が高い。また、3号地下式墓寄生型消失円墳の周溝内からも須恵器坏身等が出土しているが、陶邑TK217型式の新段階であり、後述するが古墳より地下式横穴墓が構築されたのは明らかに後であるため、3号地下式墓寄生型消失円墳に副葬されたものではないと思われる。その他、2号地下式墓寄生型消失円墳及び2号消失円墳からは時期を特定できる遺物は残念ながら出土しておらず、詳細については不明である。

地下式横穴墓については、それぞれ須恵器坏蓋及び坏身等が出土しており、それを対比すると、5号は陶邑TK217型式古段階併行期、6号は陶邑TK209型式新段階～TK217型式古段階併行期に対応している。しかし、構築時期については、追葬等も確認され、ただ単純に当てはめることはできないことから、この5号と6号との関係については後述する。いずれにしても、この国分第3遺跡の南側に隣接した国分第2遺跡からも、陶邑TK209型式からTK217型式併行期の地下式横穴墓4基を検出しておらず、周辺一帯は6世紀末から7世紀前葉頃を中心にした地下式横穴墓群であると考えられる。

なお、同中間台地上には同じ時期の地下式横穴墓が確認された堂ヶ嶋第2遺跡が所在している。この堂ヶ嶋第2遺跡には寄生型の地下式横穴墓も存在するが、単独のものが多く、さらに、墓道を有するものもある。国分第3遺跡の地下式横穴墓は今のところ寄生型のみで、単独及び墓道を伴うものではなく、堂ヶ嶋第2遺跡とは若干様相を異にしており、堂ヶ嶋第2遺跡のように6世紀末から7世紀中頃の短期間に大きく変化している様子は見られない。この違いは、何を意味するのか現在のところはっきりしないが、今後の研究課題である。

土塘については、2基検出しているが、いずれも共伴遺物の特徴から9世紀頃と思われる。

これらのことから時代の変遷を復元すると、まず、縄文時代早期には生活の場として営まれたが、前期以降は何らかの理由で営まれなくなり、それが、古墳時代の6世紀前半には古墳が、6世紀末から7世紀前葉には地下式横穴墓が構築され、墓地として認識されるようになり、そして、平安時代前期には再び生活の場を中心として営まれるようになり現代にまで至ったと想定される。

5号地下式横穴墓の豊坑埋土について

今回の調査では特に豊坑について、断面からだけでなく、平面からも構築の状況を把握するため慎重に掘削を進めた。結果、初葬時に隧道や玄室を掘削し、川原石閉塞後豊坑を埋めた土は第V～VII層（自然層）が多量に混入した層（Fig.16 第17層）で、その範囲はFig.24③のような広がりを示している。そして、Fig.10の第3層（内側周溝南側）と、Fig.16の第15・16層が追葬時の埋土で、その範囲はFig.24①と②のような広がりを示している。豊坑埋土の第17層のブロックが大きく多量

に混入しているのに対し、第3・15・16層には褐色ロームのブロックが混入しているものの、量的に少なく、大きさも小さい。のことから、第3層(Fig. 24①)は追葬時に堅坑を掘り出したとき、15・16層(Fig. 24②)はそれを埋め戻した追葬時の堅坑内埋土であると思われる。

このように、周溝に堅坑が掘り込まれたゆえに確認できた堅坑埋土の状況であり、地下式横穴墓を構築する際の様子が窺える貴重なデータである。

なお、5号地下式横穴墓が寄生している消失円墳は、二重周溝を有しているが、外側周溝にはこのような褐色ロームのブロックは混入した層は確認できなかったが、内側周溝では南・東・西側で確認できる。それはFig. 10の第10・13・19・20層であるが、これらの層は、古墳の周溝を掘削し、そして、最終的に仕上げるために埋め戻した層で、このような層は2号地下式墓寄生型消失円墳の北側周溝(Fig. 7の第7・8層)でも確認できることから、地下式横穴墓が構築される以前の状況と思われる。

一方、3号地下式墓寄生型消失円墳の第7・9・10層(Fig. 10東側全体断面)は6号地下式横穴墓を構築した際の土が混入した層であると思われる。

5号地下式横穴墓と6号地下式横穴墓の関係について

5号については、追葬が行われており、そのことは堅坑断面からも確認できる。そして、その際に初葬時の閉塞石を屍床として使用した可能性が非常に高い。それは、羨門に残っているのが初葬時の約半分程度であり、玄室内屍床の疊数がその半分に値すること、石の大きさや形が羨門と同じであること、さらに、追葬時に初葬時の閉塞石を取り外しているが、それが堅坑及びその周辺に全く見当たらないことなどを考慮して判断した。このように、追葬時に新たに屍床を設けたとなると、初葬時の人骨や副葬品をどこかに移動しなければならない。そこで、まず考えられるのは同じ玄室内にとなるが、玄室内には時期差を表すような遺物は見当たらなく、外に持ち出した以外には考えられない。そうなると、ひとつの方法として考えられるのが、近くに小規模な地下式横穴墓を構築し、その中に埋葬するいわゆる改葬墓という埋葬形態であり、それが6号ではないかという可能性を含めて検討した。6号は5号と比較して、格段に小さく、大きさだけで判断すると小児墓的なものということになるが、その割には副葬品が多く、時期的にも5号より1段階古いものが副葬されていることなどから考慮すると6号は改葬墓というのが妥当であると思われる。そうなると、6号の副葬品は5号の初葬時のものであり、5号が陶邑TK209型式新段階に構築され、5号の追葬時すなわちTK217型式併行期が6号の構築された時期となるが、あくまでも可能性を含めた検討であり、今後研究していくなければならない重要な課題である。

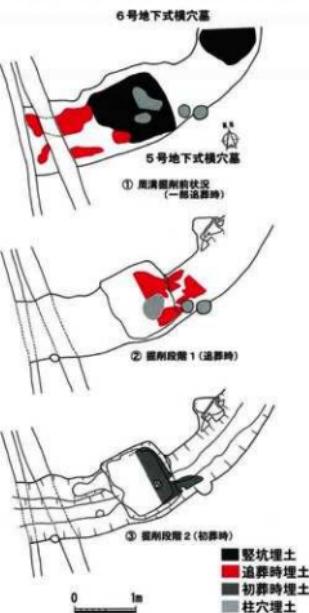


Fig. 24 5号・6号地下式横穴墓堅坑内
埋土変遷状況 (s=1/200)



1. 国分第3遺跡遠景(空撮、西より)



2. 国分第3遺跡近景(空撮、真上より)



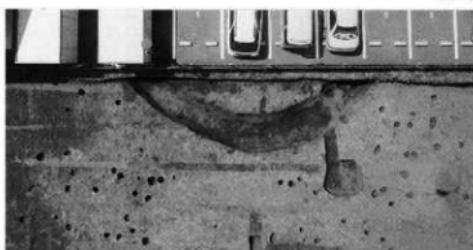
3. 1号集石遺構検出状況



4. 2号集石遺構検出状況



5. 3号集石遺構検出状況



6. 2号地下式墓寄生型消失円墳
検出状況(空撮、真上より)



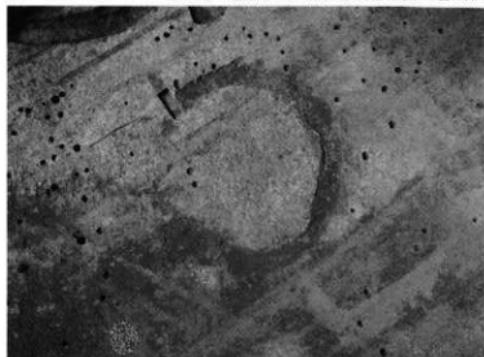
7. 3号地下式墓寄生型消失円墳
検出状況(空撮、真上より)



8. 3号地下式墓寄生型消失円墳
検出状況(南東より)



9. 3号地下式墓寄生型消失円墳周溝土層断面状況



10. 1号消失円墳検出状況
(空撮、真上より)



11. 1号消失円墳検出状況(西より)



12. 2号消失円墳検出状況(北より)



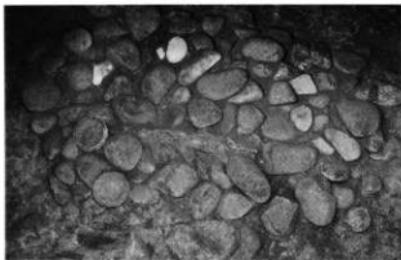
13. 5号地下式横穴墓堅坑上層断面状況



14. 5号地下式横穴墓堅坑検出状況



15. 5号地下式横穴墓玄室内検出状況①



16. 5号地下式横穴墓玄室内検出状況②



18. 6号地下式横穴墓玄室内検出状況①



17. 6号地下式横穴墓検出状況
(南東より)



19. 6号地下式横穴墓玄室内検出状況②



20. 1号土壤検出状況



21. 2号土壤検出状況(東より)



2号地下式墓寄生型消失円墳



10

11

12

13



14

15

1号消失円墳



18

20



19

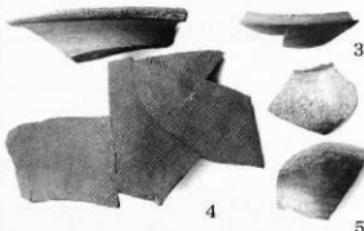
21



22

23

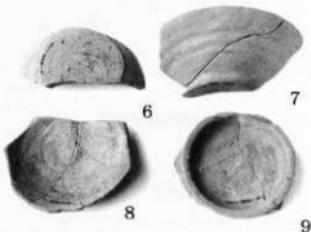
5号地下式横穴墓



3

4

5



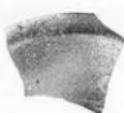
6

7

8

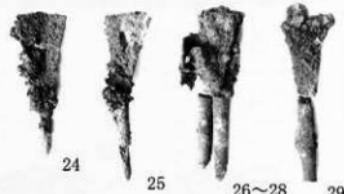
9

3号地下式墓寄生型消失円墳



17

16



24

25

26~28

29



30

31

32



33



34

5号地下式横穴墓



35



36



37



38



39

6号地下式横穴墓



40



41



42



43

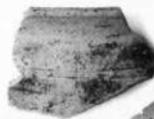


44



45

1号土壤



46



47



48

2号土壤



49



50



51



52

柱穴群

報告書抄録

ふりがな	こくぶだいさんいせき						
書名	国分第3遺跡						
副書名	西都農業協同組合の宅地造成工事に伴う発掘調査報告書						
卷次	第1集						
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第38集						
編著者名	義方政幾						
編集機関	西都市教育委員会						
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市翌陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111						
発行年月日	西暦 2004年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号				
こくぶだいさんいせき 国分第3遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあさみあけあごくぶ 大字三宅宇国分	452084	1009	X=-99446.000 Y=37648.500 X=-99477.000 Y=37700.000	20040620 20040331		2,657
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宅地造成工事 に伴う発掘調査	古墳 生活遺構	縄文～近世	集石遺構 消失円墳 地下式墓寄生型消失円墳 地下式横穴墓 土壙 柱穴群	縄文土器 土師器・須恵器 陶磁器 鉄製品			

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第38集

「国分第3遺跡発掘調査報告書」

平成16年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 (有)河野印刷所
